

# ゼロ弾きのゴーシュ

宮沢賢治

青空文庫



ゴーシユは町の活動写真館でセロを弾く係りでした。けれどもあんまり上手でないという評判でした。上手でないどころではなく実は仲間の楽手のなかではいちばん下手でしたから、いつでも楽長にいじめられるのでした。

ひるすぎみんなは楽屋に円くならんで今度の町の音楽会へ出す

第六 交こうき響きょう曲きょくの練習をしていました。

トランペツトは一生けん命歌っています。

ヴァイオリンも二いろ風のように鳴っています。

クラリネットもボーボーとそれに手伝っています。

ゴーシユも口をりんと結んで眼めを皿さらのようにして楽譜がくふを見つめ

ながらももう一心に弾いています。

にわかにはたつと楽長が両手を鳴らしました。みんなぴたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

「セロがおくれた。トオテテ テテテイ、ここからやり直し。はいっ。」

みんなは今の所の少し前の所からやり直しました。ゴーシュは顔をまっ赤にして額に汗あせを出しながらやっといまい云われたところを通りました。ほっと安心しながら、つづけて弾いていますと楽長がまた手をぱつと拍うちました。

「セロっ。糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」

みんなは気の毒そうにしてわざとじぶんの譜をのぞき込んだり  
じぶんの楽器をはじめて見たりしています。ゴージュはあわてて  
糸を直しました。これはじつはゴージュも悪いのですがセロもず  
いぶん悪いのでした。

「今の前の小節から。はいっ。」

みんなはまたははじめました。ゴージュも口をまげて一生けん命  
です。そしてこんどはかなり進みました。いいあんばいだと思います  
ていると楽長がおどすような形をしてまたぱたと手を拍ちまし  
た。またかとゴージュはどきつとしましたがありがたいことには  
こんどは別の人でした。ゴージュはそこでさつきじぶんのときみ  
んながしたようにわざとじぶんの譜へ眼を近づけて何か考えるふ

りをしていました。

「ではすぐ今の次。はいっ。」

そらと思つて弾き出したかと思うといきなり楽長が足をどんと踏ふんでどなり出しました。

「だめだ。まるでなつていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことで。諸君。演奏までもうあと十日しかないんだよ。音楽を専門にやっているぼくらがあの金沓かなぐつかじ鍛冶かじだの砂糖屋の丁稚でっちなんかの寄り集りに負けてしまったらいったいわれわれの面目めんもくはどうなるんだ。おいゴーシュ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてない。怒おこるも喜ぶも感情というもののがさっぱり出ないんだ。それにどうしてもぴたつと

外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけた靴くつのひもを  
引きずってみんなのあとをついてあるくようなんだ、困るよ、し  
っかりしてくれないとねえ。光輝こうきあるわが金星音楽団がきみ一人  
のために悪評をとるようなことでは、みんなへもまったく気の毒  
だからな。では今日は練習はここまで、休んで六時にはかつきり  
ボックスへ入ってくれ給たまえ。」

みんなはおじぎをして、それからたばこをくわえてマツチをす  
ったりどこかへ出て行ったりしました。ゴシユはその粗末そまつな箱はこ  
みたいなセロをかかえて壁かべの方へ向いて口をまげてぼろぼろ泪なみだを  
こぼしましたが、気をとり直してじぶんだけたったひとりいまや  
ったところをはじめからしずかにもいちど弾きはじめました。

その晩遅くおそゴーシュは何か巨おおきな黒いものをしよってじぶんの家へ帰つてきました。家といつてもそれは町はずれの川ばたにあるこわれた水車小屋で、ゴーシュはそこにたつた一人ですんでいて午前は小屋のまわりの小さな畑でトマトの枝えだをきつたり甘藍キャベジの虫をひろつたりしてひるすぎになるといつも出て行つていたのです。ゴーシュがうちへ入つてあかりをつけるとさっきの黒い包みをあげました。それは何でもありません。あの夕方のごつごつしたセロでした。ゴーシュはそれを床ゆかの上にそつと置くと、いきなり柵たなからコップをとつてバケツの水をぐくぐくのみました。

それから頭を一つふつて椅子いすへかけるとまるで虎とらみたいな勢いきおいでひるの譜を弾きはじめました。譜をめくりながら弾いては考え考

えては弾き一生けん命しまいまで行くとまたはじめからなんべんもなんべんもごうごうごうごう弾きつづけました。

夜中もとうにすぎてしまいはもうじぶんが弾いているのかもわからないようになって顔もまっ赤になり眼もまるで血走つてとても物<sup>もの</sup>凄<sup>すご</sup>い顔つきになりいまにも倒<sup>たお</sup>れるかと思うように見えませんでした。

そのとき誰<sup>たれ</sup>かうしろの扉<sup>と</sup>をとんと叩<sup>たた</sup>くものがありました。「ホーシユ君か。」ゴーシユはねぼけたように叫<sup>さけ</sup>びました。ところ<sup>お</sup>ろがすうと扉を押してはいって来たのはいままで五六ぺん見たことのある大きな三毛猫<sup>みけねこ</sup>でした。

ゴーシユの畑からとった半分熟したトマトをさも重そうに持つ

て来てゴーシュの前におろして云いました。

「ああくたびれた。なかなか運搬うんぱんはひどいやな。」

「何だと」ゴーシュがききました。

「これおみやです。たべてください。」三毛猫が云いました。

ゴーシュはひるからのむしやくしやを一ぺんにどなりつけました。

「誰がきさまにトマトなど持ってこいと云った。第一おれがきさまらのもってきたものなど食うか。それからそのトマトだつておれの畑のやつだ。何だ。赤くもならないやつをむしつて。いままでもトマトの茎くきをかじったりけちらしたりしたのはおまえだろう。行つてしまえ。ねこめ。」

すると猫は肩かたをまるくして眼をすぼめてはいましたが口のあたりでにやにやわらつて云いました。

「先生、そうお怒りになっちゃ、おからだにさわります。それよりシューマンのトロメライをひいてごらんなさい。きいてあげますから。」

「生意気なことを云うな。ねこのくせに。」

セロ弾きはしやくにさわつてこのねこのやつどうしてくれようとしばらく考えました。

「いやご遠慮えんりよはありません。どうぞ。わたしはどうも先生の音楽をきかないとねむられないんです。」

「生意気だ。生意気だ。生意気だ。」

ゴーシュはすっかり真っ赤になってひるま樂長のしたように足ぶみしてどなりましたがにわかになんか氣を変えて云いました。

「では弾くよ。」

ゴーシュは何と思つたか扉にかぎをかつて窓もみんなしめてしまい、それからセロをとりだしてあかしを消しました。すると外から二十日過ぎの月のひかりが室のなかへ半分ほどはいってききました。

「何をひけと。」

「トロメライ、ロマチックシューマン作曲。」猫は口を拭いて済まして云いました。

「そうか。トロメライというのはこういうのか。」

セロ弾きは何と思ったかまはずはんけちを引きさいてじぶんの耳の穴へぎつしりつめました。それからまるで嵐あらしのような勢いきおいで「印インドの虎狩とらがり」という譜を弾きはじめました。

すると猫はしばらく首をまげて聞いていましたがいきなりパチパチパチツと眼をしたかと思うとぱつと扉の方へ飛びのきました。そしていきなりどんと扉へからだをぶつつけましたが扉はあきま  
せんでした。猫はさあこれはもう一生一代の失敗をしたという風  
にあわてだして眼や額からぱちぱち火花を出しました。するとこ  
んどは口のひげからも鼻からも出ましたから猫はくすぐったがつ  
てしばらくくしやみをするような顔をしてそれからまたさあこう  
してはいられないぞというようにはせあるきだしました。ゴーシ

ユはすっかり面白おもしろくなつてますます勢よくやり出しました。

「先生もうたくさんです。たくさんですよ。ご生ですからやめてください。これからも先生のタクトなんかとりませんから。」

「だまれ。これから虎をつかまえる所だ。」

猫はくるしがつてはねあがつてまわったり壁にからだをくつつけたりしましたが壁についたあとにはしばらく青くひかるのでした。しまいは猫はまるで風車のようにぐるぐるぐるぐるゴーシュをまわりました。

ゴーシュもすこしぐるぐるして来ましたので、

「さあこれで許してやるぞ」と云いながらようようやめました。すると猫もけろりとして

「先生、こんやの演奏はどうかしてますね。」と云いました。

セロ弾きはまたぐつとしゃくにさわりましたが何気ない風で巻たばこを一本だして口にくわえそれからマツチを一本とつて

「どうだい。工合ぐあいをわるくしないかい。舌を出してごらん。」

猫はばかにしたように尖とがった長い舌をベロリと出しました。

「ははあ、少し荒あれたね。」セロ弾きは云いながらいきなりマツチを舌でシュツとすつてじぶんのたばこへつけました。さあ猫は愕おどろいたの何の舌を風車のようにふりまわしながら入り口の扉とへ行つて頭でどんとぶつつかつてはよろよろとしてまた戻もどつて来てどんとぶつつかつてはよろよろまた戻つて来てまたぶつつかつてはよろよろにげみちをこさえようとなりました。

ゴーシュはしばらく面白そうに見ていましたが

「出してやるよ。もう来るなよ。ばか。」

セロ弾きは扉をあけて猫が風のように萱かやのなかを走って行くのを見てちよつとわらいました。それから、やつとせいせいしたというようにぐつすりねむりました。

次の晩もゴーシュがまた黒いセロの包みをついで帰ってきました。そして水をごくごくのむとそつくりゆうべのとおりぐんぐんセロを弾きはじめました。十二時は間もなく過ぎ一時もすぎ二時もすぎてもゴーシュはまだやめませんでした。それからもう何時だかもわからず弾いているかもわからずごうごうやっていますと誰たれか屋根裏をこつこつと叩くものがあります。

「猫、まだこりないのか。」

ゴーシユが叫びますといきなり天てんじょう井いの穴からぽろんと音がして一疋ひきの灰いろの鳥が降りて来ました。床へとまったのを見るとそれはかつこうでした。

「鳥まで来るなんて。何の用だ。」ゴーシユが云いました。

「音楽を教わりたいのです。」

かつこう鳥はすまして云いました。

ゴーシユは笑って

「音楽だと。おまえの歌は、かつこう、かつこうというだけじゃあないか。」

するとかつこうが大へんまじめに

「ええ、それなんです。けれどもむずかしいですからねえ。」と云いました。

「むずかしいもんか。おまえたちのはたくさん啼なくのがひどいだけで、なきようは何でもないじゃないか。」

「ところがそれがひどいんです。たとえばかつこうとこうなくのとかつこうとこうなくのとは聞いていてもよほどちがうでしょう。」

「ちがわないね。」

「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかつこうと一万云えば一万みんなちがうんです。」

「勝手だよ。そんなにわかつてるなら何もおれの処ところへ来なくても

いいではないか。」

「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです。」

「ドレミファもくそもあるか。」

「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです。」

「外国もくそもあるか。」

「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついてうたいますから。」

「うるさいなあ。そら三べんだけ弾<sup>ひ</sup>いてやるからすんだらさっさと帰るんだぞ。」

ゴーシユはセロを取り上げてボロンボロンと糸を合わせてドレミファソラシドとひきました。するとかつこうはあわてて羽をば

たばたしました。

「ちがいます、ちがいます。そんなんでないんです。」

「うるさいなあ。ではおまえやつてごらん。」

「こうですよ。」 かつこうはからだをまえに曲げてしばらく構えてから

「かつこう」と一つなきました。

「何だい。それがドレミファかい。おまえたちには、それではドレミファも第六 こうきょうがく 交響樂も同じなんだな。」

「それはちがいます。」

「どうちがうんだ。」

「むずかしいのはこれをたくさん続けたのがあるんです。」

「つまりこうだろう。」セロ弾きはまたセロをとって、かっこうかっこうかっこうかっこうかっこうとつづけてひきました。

するとかっこうはたいへんよろこんで途とちゆう中からかっこうかっこうかっこうかっこうとついでに叫さけびました。それももう一生懸命からだをまげていつまでも叫ぶのです。

ゴーシユはどうとう手が痛くなつて

「こら、いいかげんにしないか。」と云いながらやめました。するとかっこうは残念そうに眼めをつりあげてまだしばらくくないていました。がやつと

「……かっこうかくうかっかっかっか」  
と云つてやめました。  
ゴーシユがすっかりおこつてしまつて、

「こらとり、もう用が済んだらかえれ」と云いました。

「どうかもういつペン弾いてください。あなたのはいいようだけれどもすこしちがうんです。」

「何だと、おれがきさまに教わってるのではないんだぞ。帰らんか。」

「どうかたつたもう一ぺんおねがいです。どうか。」かつこうは頭を何べんもこんこん下げました。

「ではこれつきりだよ。」

ゴーシュは弓をかまえました。かつこうは「くっ」とひとつ息をして

「ではなるべく永くおねがいたします。」と行ってまた一つお

じぎをしました。

「いやになっちゃうなあ。」ゴーシユはにが笑いしながら弾きはじめました。するとかつこうはまたまるで本気になって「かつこうかつこうかつこう」とからだをまげてじつに一生けん命叫びました。ゴーシユははじめはむしやくしやくしていましたがいつまでもつづけて弾いているうちにふつと何だかこれは鳥の方がほんとうのドレミファにはまっているかなという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかつこうの方がいいような気がするのです。「えいこんなばかなことしていたらおれは鳥になってしまいうんじやないか。」とゴーシユはいきなりぴたりとセロをやめました。するとかつこうはどしんと頭を叩か<sup>たた</sup>れたようにふらふらつとし

てそれからまたさつきのように

「かつこうかつこうかつこうかつかつかつかつかつ」と云いつてやめました。それから恨うらめしそうにゴーシユを見て

「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意気地ないやつでも、  
だから血が出るまでは叫ぶんですよ。」と云いました。

「何を生意気な。こんなばかなまねをいつまでしてられるか。  
もう出て行け。見ろ。夜があけるんじゃないか。」ゴーシユは窓  
を指さしました。

東のそらがぼうつと銀いろになってそこをまっ黒な雲が北の方  
へどんどん走っています。

「ではお日さまの出るまでどうぞ。もう一ぺん。ちよつとですか

ら。」

かつこうはまた頭を下げました。

「黙れ<sup>だま</sup>っ。いい気になって。このばか鳥め。出て行かんとむしつて朝飯に食つてしまふぞ。」ゴーシュはどんと床をふみました。

するとかつこうはにわか**に**びつくりしたようにいきなり窓をめぐがけて飛び立ちました。そして硝子にはげしく頭をぶつつけてばたつと下へ落ちました。

「何だ、硝子へばかだなあ。」ゴーシュはあわてて立つて窓をあけようとしましたが元来この窓はそんなにいつでもするする開く窓ではありませんでした。ゴーシュが窓のわくをしきりにがたがたしているうちにまたかつこうがばつとぶつつかつて下へ落ちま

した。見ると嘴くちばしのつけねからすこし血が出ています。

「いまあけてやるから待っているら。」「ゴーシュがやつと二寸ばかり窓をあけたとき、かつこうは起きあがって何が何でもこんどこそというようにじっと窓の向うの東のそらを見つめて、あらん限りの力をこめた風でぱつと飛びたちました。もちろんこんどは前よりひどく硝子につきあたってかつこうは下へ落ちたまましばらく身動きもしませんでした。つかまえてドアから飛ばしてやろうとゴーシュが手を出しましたらいきなりかつこうは眼をひらいて飛びのきました。そしてまたガラスへ飛びつきそうにするのです。ゴーシュは思わず足を上げて窓をぱつとけりました。ガラスは二三枚物すごい音して砕くだけ窓はわくのまま外へ落ちました。

そのがらんとした窓のあとをかつこうが矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでもまつすぐに飛んで行ってとうとう見えなくなっていました。ゴーシユはしばらく呆れた<sup>あき</sup>ように外を見ていましたが、そのまま倒れる<sup>たお</sup>ように室の<sup>へや</sup>すみへころがって<sup>ねむ</sup>睡ってしまいました。

次の晩もゴーシユは夜中すぎまでセロを弾いてつかれて水を一杯<sup>いっぱい</sup>のんでいきますと、また扉<sup>と</sup>をこつこつ叩く<sup>たた</sup>ものがあります。

今夜は何が来てもゆうべのかつこうのようにはじめからおどかして追<sup>お</sup>い払<sup>はら</sup>ってやろうと思つてコツプをもつたまま待ち構えて居<sup>お</sup>りますと、扉がすこしあいて一<sup>たぬき</sup>疋の狸の子がはいってきました。ゴーシユはそこでその扉をもう少し広くひらいて置いて置いと足

をふんで、

「こら、狸、おまえは狸たぬき汁じるということを知っているかつ。」  
とどなりました。すると狸の子はぼんやりした顔をしてきちんと床へ座すわったままどうもわからないというように首をまげて考えていました。が、しばらくたつて

「狸汁つてぼく知らない。」と云いました。ゴーシュはその顔を見て思わず吹き出ふそうとしましたが、まだ無理に恐こわい顔をして、

「では教えてやろう。狸汁というのはな。おまえのような狸をな、キャベジや塩とまぜてくたくたと煮にておれさまの食うようにしたものだ。」と云いました。すると狸の子はまたふしぎそうに

「だってぼくのお父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人でこ

わくないから行って習えと云ったよ。」と云いました。そこでゴ  
ーシユもとうとう笑い出してしまいました。

「何を習えと云ったんだ。おれはいそがしいんじゃないか。それ  
に睡いんだよ。」

狸の子は俄にわかきおいに勢がついたように一足前へ出ました。

「ぼくは小太鼓こだいこの係りでねえ。セロへ合わせてもらって来いと云  
われたんだ。」

「どこにも小太鼓がないじゃないか。」

「そら、これ」狸の子はせなから棒きれを二本出しました。

「それでどうするんだ。」

「ではね、『愉快ゆかいな馬車屋』を弾いてください。」

「なんだ愉快な馬車屋ってジャズか。」

「ああこの譜ふだよ。」狸の子はせなかからまた一枚の譜をとり出しました。ゴーシュは手にとってわらい出しました。

「ふう、変な曲だなあ。よし、さあ弾くぞ。おまえは小太鼓を叩くのか。」ゴーシュは狸の子がどうするのかと思つてちらちらそつちを見ながら弾きはじめました。

すると狸の子は棒をもつてセロの駒こまの下のところを拍ひょうし子をとつてぽんぽん叩きはじめました。それがなかなかうまいので弾いているうちにゴーシュはこれは面白おもしろいぞと思ひました。

おしまいまでひいてしまうと狸の子はしばらく首をまげて考えました。

それからやっと思えついたというように云いました。

「ゴーシユさんはこの二番目の糸をひくときはきたいに遅れるねえ。なんだかぼくがつまずくようになるよ。」

ゴーシユははつとしました。たしかにその糸はどんなに手早く弾いてもすこしたつてからでないと言音が出ないような気がゆうべからしていたのでした。

「いや、そうかもしれない。このセロは悪いんだよ。」とゴーシユはかなしそうに云いました。すると狸は気の毒そうにしてまたしばらく考えていましたが

「どこが悪いんだろうなあ。ではもう一ぺん弾いてくれますか。」  
「いいとも弾くよ。」ゴーシユははじめました。狸の子はさつき

のようにとんとん叩きながら時々頭をまげてセロに耳をつけるようにしました。そしておしまいまで来たときは今夜もまた東がぼうと明るくなっていました。

「ああ夜が明けたぞ。どうもありがとう。」狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかへしよってゴムテープでぱちんととめておじぎを二つ三つすると急いで外へ出て行ってしまいました。

ゴーシュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいってくる風を吸っていましたが、町へ出て行くまで睡って元気をとり戻<sup>もど</sup>そうと急いでねどこへもぐり込み<sup>こ</sup>ました。

次の晩もゴーシュは夜通しセロを弾いて明方近く思わずつかれて楽譜をもったままもうとうとしていますとまた誰<sup>たれ</sup>か扉<sup>と</sup>をこつこつ

と叩くものがあります。それもまるで聞えるか聞えないかの位でしたが毎晩のことなのでゴーシユはすぐ聞きつけて「おはいり。」と云いました。すると戸のすきまからはいつて来たのは一ぴきの野ねずみでした。そして大へんちいさなこどもをつれてちよろちよろとゴーシユの前へ歩いてきました。そのまた野ねずみのこともときたらまるでけしごむのくらいしかなないのでゴーシユはおもわずわらいました。すると野ねずみは何をわらわれたろうというようにきよろきよろしながらゴーシユの前に来て、青い栗くりの実を一つぶ前においてちやんとおじぎをして云いました。

「先生、この児こがあんばいがるくて死こにそうでございませすが先生お慈悲じひになおしてやってくださいまし。」

「おれが医者などやれるもんか。」ゴーシュはすこしむっとして云いました。すると野ねずみのお母さんは下を向いてしばらくだまつていましたがまた思い切ったように云いました。

「先生、それはうそでございます、先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか。」

「何のことだかわからんね。」

「だって先生先生のおかげで、兎さんうさぎのおばあさんもなおりましたし狸さんのお父さんもなりましたしあんな意地悪のみみずくまでなおいしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけないとはあんまり情ないことでございます。」

「おいおい、それは何かの間ちがいだよ。おれはみみずくの病気

なんどなおしてやったことはないからな。もつとも狸の子はゆうべ来て楽隊のまねをして行つたがね。ははん。」ゴーシユは呆れあきてその子ねずみを見おろしてわらいました。

すると野のねずみ鼠のお母さんは泣きだしてしまいました。

「ああこの児こはどうせ病気になるならもつと早くなればよかつた。さつきまであれ位ごうごうと鳴らしておいでになつたのに、病気になるといっしょにぴたつと音がとまってもうあとはいくらおねがいしても鳴らしてくださらないなんて。何てふしあわせな子どもだろう。」

ゴーシユはびっくりして叫さけびました。

「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや兎の病気がなおると。」

どういふわけだ。それは。」

野ねずみは眼を片手でこすりこすり云いました。

「はい、ここらのものは病気になるなおとみんな先生のおうちの床下にはいつて療すのでございます。」

「すると療るのか。」

「はい。からだ中とても血のまわりがよくなつて大へんいい気持ちですぐ療る方もあればうちへ帰つてから療る方もあります。」

「ああそうか。おれのセロの音がごうごうひびくと、それがあんなの代りになつておまえたちの病気がなおるといふのか。よし。

わかつたよ。やつてやろう。」ゴーシュはちよつとギウギウと糸を合せてそれからいきなりのねずみのこどもをつまんでセロの孔あな

から中へ入れてしまいました。

「わたしもいつしよについて行きます。どこの病院でもそうですから。」おつかさんの野ねずみはきちがいようになってセロに飛びつきました。

「おまえさんもはいるかね。」セロ弾きはおつかさんの野ねずみをセロの孔からくぐしてやろうとしましたが顔が半分しかはいりませんでした。

野ねずみはばたばたしながら中のこどもに叫びました。

「おまえそこはいいかい。落ちるときいつも教えるように足をそろえてうまく落ちたかい。」

「いい。うまく落ちた。」こどものねずみはまるで蚊かのような小

さな声でセロの底で返事しました。

「大丈夫だいじょうぶさ。だから泣き声出すなというんだ。」ゴーシュはおつかさんのねずみを下におろしてそれから弓をとって何とかラプソデイとかいうものをごうごうがあが弾きました。するとおつかさんのねずみはいかにも心配そうにその音の工合ぐあいをきいていましたがとうとうこらえ切れなくなったふうで

「もう沢山たくさんです。どうか出してやってください。」と云いました。

「なあんだ、これでいいのか。」ゴーシュはセロをまげて孔のところに手をあてて待っていましたら間もなくこどものねずみが出てきました。ゴーシュは、だまってそれをおろしてやりました。



「おい、おまえたちはパンはたべるのか。」とききました。

すると野鼠はびつくりしたようにきよろきよろあたりを見まわしてから

「いえ、もうおパンというものは小麦の粉をこねたりむしたりしてこしらえたものでふくふくふく膨らんでいておいしいものなそうでございますが、そうでなくても私どもはおうちの戸棚とだなへなど参ったこともございませんし、ましてこれ位お世話になりながらどうしてそれを運びになんと参れましょう。」と云いました。

「いや、そのことではないんだ。ただたべるのかときいたんだ。ではたべるんだな。ちよつと待てよ。その腹の悪いこどもへやるからな。」

ゴーシユはセロを床へ置いて戸棚からパンを一つまみむしつて野ねずみの前へ置きました。

野ねずみはもうまるでばかのようになって泣いたり笑ったりおじぎをしたりしてから大じそうにそれをくわえてこどもをさきに立てて外へ出て行きました。

「あああ。鼠と話すのもなかなかつかれるぞ。」ゴーシユはねどこへどっかかり倒れてたおすぐぐうぐうねむってしまいました。

それから六日目の晩でした。金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールの裏にあるひかえしつ控室へみんなぱつと顔をほてらしてめいめい楽器をもつて、そろそろホールの舞台から引きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたのです。ホールでは拍手の

音がまだ嵐あらしのように鳴って居おります。楽長はポケットへ手をつつ込んで拍手なんかどうでもいいというようにそのそのそみんなの間を歩きまわっていました。じつはどうして嬉うれしきでいっぱいなのでした。みんなはたばこをくわえてマッチをすったり楽器をケースへ入れたりしました。

ホールはまだぱちぱち手が鳴っています。それどころではなくいよいよそれが高くなって何だかこわいような手がつけられないような音になりました。大きな白いリボンを胸につけた司会者がはいつて来ました。

「アンコールをやっていますが、何かみじかいものでもきかせてやってくださいませんか。」

すると楽長がきつとなつて答えました。「いけませんな。こういう大物のあとへ何を出したつてこつちの気の済むようには行くもんでないんです。」

「では楽長さん出て一寸挨拶ちよつとあいさつしてください。」

「だめだ。おい、ゴーシユ君、何か出て弾いてやってくれ。」

「わたしがですか。」ゴーシユは呆氣あつけにとられました。

「君だ、君だ。」ヴァイオリンの一番の人がいきなり顔をあげて云いました。

「さあ出て行きたまえ。」楽長が云いました。みんなもセロをむりにゴーシユに持たせて扉とをあけるといきなり舞台へゴーシユを押し出おしてしまいました。ゴーシユがその孔のあいたセロをもつ

てじつに困ってしまつて舞台へ出るとみんなはそら見ろというように一そうひどく手を叩たたきました。わあと叫んだものもあるようでした。

「どこまでひとをばかにするんだ。よし見ている。印度インドの虎狩とらがりをひいてやるから。」ゴーシュはすっかり落ちついて舞台のまん中へ出ました。

それからあの猫ねこの来たときのようにまるで怒おこつた象いきおいのような勢いきおいで虎狩りを弾きました。ところが聴ちやうしゆう衆しゆうはしいんとなつて一生けん命聞いています。ゴーシュはどんどん弾きました。猫が切ながつてぱちぱち火花を出したところも過ぎました。扉へからだを何べんもぶつつけた所も過ぎました。

曲が終るとゴーシユはもうみんなの方などは見もせずちようどその猫のようにすばやくセロをもつて楽屋へ遁にげ込みました。すると楽屋では楽長はじめ仲間がみんな火事にでもあつたあとのように眼をじつとしてひっそりとすわり込んでいます。ゴーシユはやぶれかぶれだと思つてみんなの間をさつさとあるいて行つて向うの長椅子ながいすへどつかりとからだをおろして足を組んですわりました。

するとみんなが一ぺんに顔をこつちへ向けてゴーシユを見ました。がやはりはじめでべつにわらっているようでもありませんでした。

「こんやは変な晩だなあ。」

ゴーシュは思いました。ところが楽長は立つて云いました。

「ゴーシュ君、よかつたぞお。あんな曲だけでもここではみん  
なかなり本気になつて聞いてたぞ。一週間か十日の間にずいぶん  
仕上げたなあ。十日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。やろ  
うと思えばいつでもやれたんじゃないか、君。」

仲間もみんな立つて来て「よかつたぜ」とゴーシュに云いまし  
た。

「いや、からだが丈夫だからこんなこともできるよ。普通ふつうの人な  
ら死んでしまうからな。」楽長が向うで云つていました。

その晩おそ遅くゴーシュは自分のうちへ帰つて来ました。

そしてまた水をがぶがぶ呑のみました。それから窓をあけていつ

かかっこの飛んで行ったと思つた遠くのそらをながめながら  
「ああかっこの。あのときはすまなかつたなあ。おれは怒つたん  
じやなかつたんだ。」と云いました。



# 青空文庫情報

底本：「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年6月15日発行

1994（平成6）年6月5日13刷

底本の親本：「新修宮沢賢治全集 第十二卷」筑摩書房

1980（昭和55）年1月

入力：水口充、野口英司

校正：野口英司

1999年7月23日公開

2008年10月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ゼロ弾きのゴーシュ

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>